

あらう、私の想像が誤りなくば右は *C. langillei* (Phillipi) (= *fortunei* A. Adams) であらう、九州の或る地方に産する此の種は一見前記の加州から中米産の一種に甚しく似寄つたものであるからである。

最後に此の報告の校正が著者達の手によらなかつたものゝ如くで、誤植が無暗に多かつたことは讀者を誤らせなければよいがと心配する、日本及び朝鮮の貝類に對する文献を列記せられたことは益するところ甚だ多い、序に一つ Adams と Reeve との合報告 *Samarang* の Report は今日では稀有の本で、不幸私共も未見の一冊であるが、朝鮮海峡の貝を若干載せられて居る筈である、また Dall の Synopsis は *Luchnagosa* の外約二十篇にも上るべく、二枚貝の大科は大概取扱ひ盡した、更にまた Lamy の Revision a *Cypriacidae* のみならず、*Arceidae* 始め澤山な同様のものが *Journal de Conchyliologie* に連載されて居ることを附言して筆を擱く妄評多罪。(黒田徳米)

新著紹介

○奈良縣に於ける指定史蹟第二冊

昭和三年二月發行、刀江書院、定價五圓五十錢

本書はさきに出た同史蹟報告第一冊につぐもので、知友上田三平氏の執筆にかゝるものである。第一冊は古墳、石窟佛、石塔等十箇ヶ所を述べ、本第二冊は平城宮址、吉野山、山田

摘 錄

寺、川原寺、大官大寺等十四ヶ所の史蹟の紹介である。圖版コロタイプ八十枚、四六倍版本文百頁、誠に堂々たる著述であるが、流石官製であるから賣價が馬鹿に安い。歴史學者の坐右にすゝめるべき良書であると同時に過去の奈良を學んで我國の人文現象を理解せんとする人文地理學者にも是非一讀せんことをすゝめる。外國のコルドバとか、ナイル河畔の金字塔とかいふ古代文化の遺跡は教授しながら、日本文化の發祥した奈良の平野や平城京の遺址等については何等の智識も持たぬ所謂人文地理學者の多い今日、内務省のこの種の本を廉賣普及せんとする態度について大に感謝するものである、第一冊の如き既に賣り盡したとの事である。第二冊の方は品切れにならぬさきに學校などの圖書室に備付せんことをすゝめる。(藤田)

○有史以前の近江

滋賀縣史蹟調查報告第一冊

昭和三年四月、滋賀縣保勝會

本書は友人島田貞彦氏が滋賀縣史編纂のこの方面に力を致された結果として世に出たものである。四六倍版三十二頁圖版二十四、挿圖一八から堂々たる報告書で序語、地形、遺蹟及遺物發見地の分布及その概観、湖北地方の遺蹟、遺物、湖東、湖南、湖西各地の發見遺物、近江國發見の銅鐸等を論じて最後に銅鐸概説及史前の近畿について考古學時代の説明がしてある。猶附録として雲根志と木内石亭の一章がある。考古學者の著述ではあるが、地理學に對する智識の豊富な著者

要 略

七一

雜報

が巧みに遺物の分布と其環境の人文現象を説述してゐるのは、うれしいことである。各篇いづれも参考文献を詳記してゐる苦心も買はねばならぬ。博物學者としての木内石亭の著述、根志の中に出た石器を、考古學上から見なほしてゐるもの、この縣の過去に於て誇るべき先輩業績の顯彰として體を成したものと喜んでおきたい。(F)

○横手町の地理

横手女子小學校柴田良一氏著

秋田縣平鹿郡の中心、人口一萬六千七百の横手町の地理と人文との交渉を極めて平易に書いた讀本で小學校の生徒に讀ますものである。町のでき方、川と横手、雪と横手、風と横手町名の起原といった各章何れも面白く述べてあるが、しかしこの町の歴史には全くふれてない。名が地理だからであらう。但し横手木綿が凡三百年前からの産出で文化文政から明治二十五年頃まで盛んに製織されて、年額織木綿三十六反染木綿四萬反を産したといふ處に少したけ歴史的發達の理由がのべてある。大體は自然地理に則しての人文地理の解説である。挿圖も巧妙に入つてゐる。寫眞も面白く集めてある、五一頁の手頃な本である、非賣品であるが、生徒には一冊づゝ持たすのであらう。横手の名の起りが横堤^{ヨコヅエ}の略されたもので川と縁がある。川を境として大きく内町と外町の二つにわけられ内町に猶茅屋根の家がのこつてゐる。町勢は現在外町の方に移つて、交通線に伴ひヒトデのやうに延びゆくことを教はつたことを感謝する。(藤田)

○愛知地理學會

五月六日午後一時より名古屋、縣立第一高等女學校に於て開會、來集するもの百餘名に達し盛況を極む。講演左の如し

一、臺灣の印象

村山清吉氏

二、日本民家の形式と其分布について

藤田元春氏

村山氏は嘗て臺灣に奉職せられしことありて實地の見聞を説明せられ、藤田氏は特に本學岡より出張來名、日本民家の三大別について、即山地の居住と平野の村落及海岸漁村の各特色と其共通點につき其起原より説明せられ聴衆に多大の興味を喚起せらる、午後四時閉會後名古屋城下町の特色たる、町内の屋根の庇の上の神祠、町裏の閑所なるもの、特色古い軒の槌覆、北國のカンギに似た宇太知さては伊藤治郎右衛門氏の三百年來の土藏及本宅等を順次一覽見學して薄暮散會(會員橋本報)

○福岡縣地理學會近況

大正十五年八月創立以來會員二百五十名に達し、會を重ねる事十回に及ぶ、最近の會合左の如し(國員金尾報)

第九回學會(昭和三年一月廿九日糸島中學校に於て)

沖繩と奄美大島との旅行談

福岡笠子

永

田